

ネパール写本
対照による

『唯識三十頌』の原典考、並びに『唯識

二十論』第一偈第二偈の原本について

——Lévi 本の原本を求めて——

舟 橋 尚 哉

はじめに

私は先に宗教学会（於、立正大学）において「ネパール写本対照による『唯識三十頌』の考察」^①を発表したが、字数制限のため充分論することができなかった。しかしその後、新しい資料も見つかったので、ここにネパール写本を用いて『唯識三十頌』を再検討してみようと思う。

さて、世親造の『唯識三十頌』と、その安慧釈 *Hi-mśikāvijñaptibhāṣyam* とは唯識思想を説明する上で、まことに重要な論書である。一般に *Vijñaptimātratā-siddhi* ^② (1925) が定本として用いられているが、最近、インドで出版された Chatterjee 本 ^③ (1980) や Mahesh Tiwary 本 ^④ (1967) などもある。

しかし S. Lévi のテキストには誤植などの問題があり、宇井博士の「梵文正誤訂正表」〔安慧・護法唯識三十頌釈論〕所収、昭和27年）や、荻原博士の「梵文改訂表」〔安慧造三十唯識の釈論和訳〕^⑤ 所収、昭和2年）によって一応読めるようになったとはいえ、まだ完全とはいえない。近年、Gokhale ^⑥ によっても訂正が加えられたが、私は最近手に入れたネパール諸写本を用いて『唯識三十頌』並びにその安慧釈を考察してみようと思う。

なお『唯識二十論』の第一偈と第二偈とは、従来、S. Lévi の還元梵語だけであったが、最近、私はこの二偈を含む『唯識二十論』の全偈〔と他二論の偈〕の書写されている貝葉〔の写真版〕を手に入れたので、この点について考察するつもりである。

1

ところで『唯識三十頌』のネパール諸写本に関しては、National Archives, Nepal の目録^⑧によれば、次の如き写本が保管されていることが知られる。

Triṃśikāvijñaptibhāṣyam, by Sthiramati

1. National Archives, Nepal, Sūcīpatram (Baud-dharsanaviśaya) I p. 44, No. 136.

貝葉、十四葉、七行(一部八行)……〔Pa. 1 本〕
略記号

この写本は貝葉であり、マイクロフィルム^⑨の初めに
お Palm-leaf (貝葉) と明記されている。Hem Raj
Collection の No. 34 (2) Triṃśikāvijñaptibhāṣyam,
by Sthiramati—Magadha, PL. 1-14 と一致するもの
と思われる。なぜなら、Hem Raj Collection の大
部分が、現在 National Archives, Nepal に移管され
ているし、十四葉と貝葉である点も合致しているから
である。

2. National Archives, Nepal

貝葉、十三葉、七行………〔Pa. 2 本〕
略記号

現在、私の持っている National Archives, Nepal
の目録には見あたらないようであるが、私は National
Archives, Nepal からこの写本を手に入れたのび、そ
こに保管されていることは間違いないと思う。この写
本のマイクロフィルムの初めに、No. 1-1697 とあるの
び、Bir Library No. 270 Triṃśika-vijñapti-bhāṣya
ca. 1697 と合致するものと思う。十三葉と old Nepa-
lese letter とある点も一致している。

3. National Archives, Nepal, Sūcīpatram 1 p. 43,
No. 255

十三葉、九行………〔Na 本〕
略記号

この写本は十三葉と、デューヴァナーガリーで書かれ
ているのび、Hem Raj Collection 35 (3) の Triṃśi-
ka-bhāṣyam, by Sthiramati に相当すると思われる。
なぜ、この写本の初めに、Triṃśikakarikāyaḥ bhā-
ṣyam とあるようである。

ところがこの写本には脱落がある。すなわち 6a の
四行目の途中まで書写して三—四行の空白があり、八
行目の途中からまた書写している。これは一体何を意

味するのでもうか。この点について、後から New York の Buddhist Sanskrit Manuscripts 中の『唯識三十頌』の写本との関連で論ずることにする。

Trisvabhāvakārikā
Viṃśatikakārikā } by Vasubandhu
Triṃśikakārikā

4 National Archives, Nepal, Sūcīpatram 1 p. 44,
No. 6462

貝葉、五葉、六行……………〔Pa. 3 本〕

略記号

この写本は貝葉であり、五葉である点よりして、
Hem Raj Collection の No. 34 (1) と相対するもの
と思われる。マイクロフィルムに初めて No. 5-6462
とあるから、National Archives, Nepal No. 6462 と
一致すると思うが、マイクロフィルムには Title が
Tri[m]śikā-kārikā となつてゐる。
* 略記号は便宜上、私がつけたものである。

これらの写本は、いずれも Hem Raj Collection か、
Bir Library にあったもので、現在、National Arch-

ives, Nepal に移管され保存されている。これらの中に、
Lévi 本の底本または原本もあると思われるが、この点
については後で論ずることにする。

この他に資料的価値は、やや劣るかもしれないが、
Triṃśikāvijñaptibhāṣyam, by Sthiramati として、
15 New York Buddhist Sanskrit Manuscripts,
MBB-I-157

二十葉、七行……………〔Ne 本〕

略記号

この写本には、ネパール暦一〇一九年とあるから、
一八九九年頃の写本であるが、Lévi 本 p. 21, l. 4
(7a) から p. 35, l. 10 (20a) までは脱落している。な
ぜこのような脱落が起ったかについては、ほぼ見当が
ついたので、後で論ずることにする。(もっとも、この
の写本が一八九九年に書写された当時のものであるの
なら、先の Na 本以上の価値があるかもしれない。)

9 National Archives, Nepal, Sūcīpatram I No.

260

二十四頁、二十一頁(第二頁のみ十九行)……………〔M 本〕
マイクロフィルムに初めて The Modern Exercise
Book とあるので、比較的新しい写本のようにも思わ

る。National Archives, Nepal の目録の No. 260

Triṃśīkākarikā sabhāṣyā に相当すると思つが（ハイクロフィルムには 262 Triṃśīkavijñaptibhāṣyam とあるから全く別のものかもしれない）更に Hem Raj Collection の No. 35 (2) の Triṃśīkā-karikā sabhāṣyā にも相当するかもしれない。もしそうであるならこの写本も Hem Raj Collection より National Archives, Nepal に移管されたことになるが、今のところよくわからない。

ただこの写本はノートのようなものに書かれており、学者かもしれないが一般人の字であつて、専門家（ネパール文字を書くことを職業とする）の字ではないように思う。おそらく Pa. 1 本か、それに類する写本より転写したのであらうが、Lévi 本も知っているように思われる。なぜなら、Pa. 1 本、Na 本、Ne 本に脱落している部分がそのまま欠文となっているし、その欠文の直前が pītami となっているのは、この M 本と Pa. 1 本と Ne 本とである（Na 本は pītami 〽とある。）次に Lévi 本を知っているのではないかと思う理由は、偈頌を初めから知っている点と、最初の 1b を 1a としている点である。（Lévi 本の 1a

は 1b の誤か）

これらの写本の中に Lévi 本の原本もあると思われるので、この点から考察してみようと思う。

II

S. Lévi は Vināyapitratatāsiddhi (1925) を出版するときに、底本について Introduction で次の如く語っている。

「最初の調べでは、頁〔付け〕が欠けていることがよくわからなかった。十四葉は順次に続いていた。ところが読んでみると、第六葉目と第七葉目との間に、ある断絶が明らかになった」^⑭

この記述によつて、Lévi が底本とした写本の一つは十四葉であり、第六葉目から第七葉目へ移るところで、意味内容の上から断絶があることが知られる。

ところで Pa. 1 本を見ると、貝葉で十四葉であり、第六葉目と第七葉目との間に意味内容の上から、かなりの脱落があることが知られる。のみならず、一、二の例外を除いて、写本の一葉ごとの始めが Lévi 本と Pa. 1 本と合致していることが、Lévi 本の底本の二つは Pa. 1

本であることを裏づけるものであろう。

Pa. 1 本が Lévi 本の底本の一つであることを決定づけるものは、Lévi 本の Introduction の最後に挿入されている『唯識三十頌』の写本（上二葉）と Pa. 1 本の最初（1b）と最後（14b 実は 27b）の写本とが一致することである。Lévi 本に挿入されている写真版は、やや不鮮明なところもあるが、両者を比較すれば Pa. 1 本であることは間違いないものと思う。

ただ最上段の 1b は Pa. 1 本とよく一致しているが、二番目の 14b（実は 27b）は、Lévi 本に挿入されている写真版は右下と左下が少し欠けているが、Pa. 1 本ではそれほど欠けていない。Lévi 本は一九二二年に一応原稿が出来上り、一九二五年に出版されている。しかし Pa. 1 本の写真版は一九七〇年写であるから、欠落部分が修正されたのであろうか。

またこの写本の大きさについて Lévi は、
「二つの写本（唯識三十頌と唯識二十論）は 30×5.5 cm の貝葉に書かれている。各頁は七行である」¹⁰⁾

と述べているが、Pa. 1 本は貝葉（Palm leaf）で 30.5×6 cm であるとマイクロフィルムの初めに明記されている。貝葉は写真で見ても両端がまるみを帯びているので、

この位の誤差は生ずるものと思う。各葉の行数も七行で一致している。従って Pa. 1 本は Lévi 本の底本の一つであることは間違いがない。

では脱落の部分に相当する写本はどこにあるのであろうか。実はその写本は Pa. 2 本であると思う。Pa. 2 本は前述の如く十三葉であり、脱落の葉数（第七葉から第十九葉までの十三葉）と一致するばかりでなく、同じく貝葉であり、文字も同じような筆跡であり、貝葉の両端がまるみを帯びているところまで一致している。この写本の大きさについては、マイクロフィルムの初めには 30×5 cm とあるが、Lévi 本には 30×5.5 cm とあるから、ほぼ一致していることが知られる。各葉の行数も七行で合致している。従ってこの Pa. 2 本も Lévi 本の底本の一つであると思われる。というよりも、おそらく Lévi は Pa. 1 本と Pa. 2 本とを底本として用いて『唯識三十頌』のテキストを出版したものと思われる。

しかし Pa. 1 本は、もとは Hem Raj Collection にあったものであり、一方 Pa. 2 本は、もとは Bir Library にあったものと思われる。従ってこれらの写本は、今は同じ National Archives, Nepal に保管されているが、以前は別々に保管されていたことになる。

ところが Pa. 1 本は、Levi 本「の底本の葉數」でい
えば、1b~6b と 20a~27b に相当し、一方、Pa. 2
本は 7a~19b に相当している。しかるに Pa. 1 本の
写本を見ると、1b~14b (勿論、數字はネパール文字で
1 とか 14 のみである) までの通し番号が入っている。と
いうことは、この數字が書かれた時期がはつきりしてい
ないので断定はできないが、比較的早い頃からこれら二
つの写本が別々に保管されていたのではなからうか。そ
う考えないと、Pa. 1 本の後半の写本に 20a~27b と
なるべきところに、7a~14b の數字が入っていて、前
半からの続き番号になっていることが説明できないから
である。

三

それでは Ne 本と Na 本には、どうしてかなりの脱
落部分があるのであろうか。Ne 本というのは、先にも
述べた如く New York の Buddhist Sanskrit Manus-
cripts MBB-1-157 やある The Institute for Advan-
ced Studies of World Religions より、そのマイク
ロフィルムが発売されているのであるが、この写本にはネ
パール暦一〇一九年写とあるから、一八九九年頃に書写

されたもの (またはそれからの転写本) である。全二十
葉で一葉の大きさは 8×20 cm である。

ところがこの写本と Levi 本と対照させて見ると、こ
の写本の 9a の三行目と四行目との間に、かなりの脱落
があることが知られる。すなわち Levi 本でいえば、p.
21, l. 3 の 6b の最後まで書写し、次は p. 35, l. 10 の
20a から始まっている。以前、Ne 本を手に入れたとき
には、なぜこのような脱落が生じたのか、よくわからな
かった。しかし Pa. 1 本や Pa. 2 本などを手に入れて
比較対照している内に、ひょっとすると Pa. 1 本の脱落
部分 (すなわち Pa. 2 本の部分) と Ne 本の脱落部分
が一致するのではないかと思ひ、両者を較べて見ると全
く合致することに気がついた。ということは、Ne 本
は Pa. 1 本をそのまま (脱落のまま) 書写したのであ
り、おそらくこの脱落にも気づかずに (なぜなら何も指
摘がないから) そのまま書写したのであろう。

当時すでに写本 (Pa. 1 本) には通し番号が入っていた
であろうから、6b の次に 7a (実は 20a) を書写するの
は当然であろう。一八九九年といへば Levi 本出版 (1925
年) 以前であるから、この脱落に気づかなかつたからと
いって非難することはできない。しかし今日、各写本が

手に入るようになったので、各写本を比較対照すれば、Ne 本の原本は Pa. 1 本であると指摘できるのである。そしてこう考えれば、No 本にかなりの脱落部分があることにも納得がいくのである。

一方、Na 本にも Ne 本と同様の脱落がある。ただ Na 本の書写者はこの脱落に気づいたから 6a の四行目の途中から八行目の途中まで空白にしたのである。ただ Ne 本は Pa. 1 本を直接書写したと考えられ、いずれも namo buddhāya = pudgaladharmā から始まっているのに Na 本では śrīḥ atha trimsīkavijñaptibhāṣyam = pudgaladharmā から始まっている。

また Na 本の 6b, l. 6 の偈頌のすぐ上に 17 というネパール文字が入っている。これはおそらく脱落した文章の直後に出る偈頌であるので、17 偈の長行の中の偈頌であることを明らかにしたのであろう。実物を見ないとわからないが、写真版によると、この数字は 7 の葉数を表わす 7 の数字と筆跡が類似しているので、おそらくこの写本の書写者が書いたものであろう。

ともかくも、この書写者は 1a から 20a に至る大きな脱落に気づき、その後の偈頌を第十七偈中の偈であるということを知っていたことになる。いずれにしても、

これら Ne 本も Na 本も Pa. 1 本が原本であるか、それからの転写本をさらに転写したものであろう。

四

ところで Pa. 3 本は五葉のみで、『三性論偈』『唯識二十論』『唯識三十頌』の偈頌のみを集めたものであり、書体は一番古いように思われる。古字が用いられており、読みにくい。前述の如く、マイクロフィルムに No. 5-6462 とあるから National Archives, Nepal の No. 6462 と一致することは間違いない。なぜなら、葉数は五葉で一致しているし、一葉の行数も六行と合致しているからである。大きさについては、マイクロフィルムの初めに 28.5×5 cm とあり、終りに 28.5×4.5 cm とあるが、写本自体、全体にまるみを帯びている貝葉であるから、この位の誤差はやむをえないものと思う。この写本 (Pa. 3 本) を使って『唯識三十頌』を考察したことはあるが、今回初めて『唯識二十論』を考察してみた。ところが Levi 本と対照させて読んでいる内に、Levi 本では還元梵語しか与えられていないところに、サンスクリットの原文が初めから古い形のままで書写されていることを発見した。すなわち、『唯識二十論』の第一偈

と第二偈とは、Lévi 本ではこの二つの偈を含むその前後の世親註が欠けているため、この二つの偈は還元梵語で補われている。しかるに今やここにサンスクリットの原本が見つかったわけで、この両者を比較対照すると、次の如くなっている。

〔Lévi 本の還元梵語〕

viñaptimātram evaitad asadartthābhāsanāt |
 - - - - - U - - - - - U - - - - - U - - - - - U - - - - -
 yathā taimirikasyāsaṭkeśaścandīdarśanam || 1 ||
 U - - - - - U - - - - - U - - - - - U - - - - - U - - - - -
 yadi viñaptir anarthā niyamo deśakālayoh |
 U - - - - - U - - - - - U - - - - - U - - - - - U - - - - -
 saṁtānasyāniyamaś ca yuktā kṛtyakriyā na ca ||
 2 ||
 - - - - - U - - - - - U - - - - - U - - - - - U - - - - -
 [Pa. 3 本の偈頌]
 viñaptimātram evedam asadartthābhāsanāt |
 - - - - - U - - - - - U - - - - - U - - - - - U - - - - -
 yadvat taimirakasyāsaṭkeśoṇḍukādarśanam || 1 ||
 - - - - - U - - - - - U - - - - - U - - - - - U - - - - -
 (yathā?) (taimirika?)

na deśakālaniyamaḥ saṁtānāniyamo na ca |
 U - - - - - U - - - - - U - - - - - U - - - - - U - - - - -
 na ca kṛtyakriyā yuktā viñaptir yadi nārth-
 atah || 2 ||
 U - - - - - U - - - - - U - - - - - U - - - - - U - - - - -

いずれも śloka の韻律と合致しているから、この点からは問題がない。特に第一偈は Lévi の還元梵語と、今度見つかった梵本とが比較的よく一致している。ここはチベット訳と漢訳(三本)があるから、それに基づいてかなり正確な還元梵語が与えられたともいえるが、それに加えてもう一つ、字井博士の指摘の如く、この第一偈は実はジャイナ白衣派の学者、ハリバドドラ (Haribhadra) によつて Lokatattvanirṇaya に引用されているから、それによつて還元梵語も作られたものと思う。そのことは第二偈を見ると個々の単語は比較的よく一致しているが、その配列順序はかなり異なっていることによつても知られるであらう。

ところでハリバドドラが Lokatattvanirṇaya の中で引用している『唯識二十論』の第一偈は次の如くである。
 viñaptimātram evaitad asadartthābhāsanāt |
 yathā taimirakasyeḥ keśakīṭādarśanam || 74 ||

さて、この第一偈の yathā であるが、写本 (Pa. 3 本) では yadvat のように見える。チベット訳は dper na であるから、そのサンスクリットは yathā も yadvat も可能であるが、^②tadyathā か yathā が一般的であると思う。従ってここは韻律上、yathā であろうか。

それから注意すべきことは、四〇〇年〜一〇〇〇年頃の写本では一見 tha は dva に見え、dva と tha とが類似していることである。^③従って yadvat が yathā → yathā と読まれたか、あるいは yathā とあったものが yadvat となったのかもしれない。

次に第一偈 d の keṣaṇḍuka か keśacandra かであるが、写本で見える限り keṣaṇḍuka (毛輪) としか読めない。しかしチベット訳が skra zla とあり、漢訳も玄奘訳は「髮蠅」(大正三一、七四c)であるが、流支訳「毛月」(大正三一、六三c)と真諦訳「毛二月」(大正三一、七〇c)とから見て candra (月)の可能性も出てくる。

勿論、keṣaṇḍuka (ーー) も keśacandra (ーー) も、韻律の上からは可能である。ひょっとすると、写本に二種類あったのかもしれない。ハリバドラの引用では keśakita と読んでいるが、これは keṣaṇḍuka の写本 (Pa. 3 本) と類似している。

さてここに『唯識二十論』の第一偈、第二偈が完全な形で、『唯識二十論』と他二論の偈頌だけを集めた写本の中で見つかったことは重要な意味を持っている。なぜなら、宇井博士もかつて論じておられるように、玄奘訳には第一偈はないが(代わりに四言四句の散文がある)、流支訳・真諦訳には第一偈が存する。

慈恩大師窺基の『唯識二十論述記』によれば、

「勘^{ウレミ}三梵本^ツ。並無^{ビニ}此頌^ミ。但訳家増^ミ」(大正四三、九八二b)

といって、流支訳と真諦訳とを非難している。しかしここに古写本の中に『唯識二十論』の第一偈、第二偈を含む全偈が見出されたことは、宇井博士のいわれるように、窺基がいうことの方にむしろ誤まりがあることが実証されたことになる。確かに玄奘が用いた梵本には第一偈は欠けていたのであろう。とすると、現存の『唯識二十論』のネパール写本も第一偈、第二偈は欠けているようであるから、これらの欠落は玄奘当時(七世紀)からの、かなり早い時代から生じていたのかもしれない。『唯識二十論』の原本はまだ手に入っていないので、それを見ないとはっきりしたことはいえないが、玄奘当時は一偈のみ欠けていて、現在は二偈欠けているのであろうか)

2 本 (13a, l. 1) を見るに *tiśnāvasad* のようである。
Lévi 本の脚註③には *-vasad* とあるから、Lévi 本の底
本と Pa. 2 本とが同じであることの裏づけになるので
はないか。従ってここは宇井博士や Gokhale の訂正で
よいと思う。

その直後の [Lévi 本' p. 28, l. 15 の] *abhinivṛtiḥ*
— *ato* は、宇井博士は *abhinivṛteḥ* — *ato* に訂正して
いるのに、Gokhale は *nivṛtiḥ* *ato* と訂正している。
Pa. 2 本 (13a, l. 1) は *nivṛtiḥ* — *ato* のようである。

宇井博士の訂正は、*チベツト語*に *mñon par hgrub pas*
deḥ phyir とあるに *nivṛteḥ* (sg. Ab) に理解する仕
方と一致している。なおこの個所は荻原博士は *nivṛtiḥ*
を *nivṛteḥ* に修正されているので、宇井博士もそれを
採用されたのかもしれない。ただ Gokhale の訂正は荻
原、宇井両博士の訂正を知っているが、安慧釈の写本
の fragment にある *nivṛtiḥ* *ato* と訂正している
ことは注目に価する。ところが Pa. 2 本では明らかに
abhinivṛtiḥ — *ato* となっている。Lévi 本と Pa. 2 本
は全く同じであるに、Gokhale の訂正もダンドを除けば
当然 *abhinivṛtiḥ* は *abhinivṛtiḥ* となるから、それ
ほどの相異はない。荻原・宇井博士のよきに *abhiniv-*

ṛteḥ と訂正すべきかどうかの問題であるが、*ato* があ
るから、Lévi 本や Pa. 2 本のよきに *abhinivṛtiḥ* —
のままでよいと思うが如何であろうか。この問題は今後
の課題としておきたい。

このあたりは荻原・宇井博士の訂正の他に Gokhale の
訂正があり、時間をかけないとどちらがよいか決定でき
ないので、次に第十二偈 b c d、第十三偈、第十四偈に
移ることにする。

Lévi 本' p. 29, l. 31 十一偈の *māyāpā* とあるが、
宇井博士は *māyaya* に訂正されている (このあたりか
らは Gokhale の訂正はなし)。Pa. 2 本 (14a, l. 7) では
明らかに *māyaya* と読めるので、おそらく Lévi 本の
誤植であろう。偈頌であるので、念のため Pa. 3 本 (4b,
l. 5) を見ると、やはり *māyaya* になっている。

次に第十三偈であるが、Lévi 本では

śāṭhyaṃ mado 'vihinsā hrir atrapā styānam udd-
bavaḥ — (13a-b)

—— — — — —
となっている。そして *śāṭhyaṃ* は Ms. に *sāṭhyaṃ*
となっていることを脚註(1)に記している。宇井博士の訂
正は *mads'vi-* を *mado vi-* とあるが、これは *mado*

vi- を mado vi- に訂正せよの誤植 (S→O) であろう。

Pa. 2 本 (14a, l. 7) を見るゝ mado vihiṃsā とあり、
Pa. 3 本 (4b, l. 5~l. 6) を mado vihiṃsā とあるから
この訂正は正しい。

次に -sā hrī- を -sāhrī- に訂正する件であるが、Pa. 2
本 (14a, l. 7) と vihiṃsā hrīr とあるところがあり、Pa.
3 本 (4b, l. 6) と vihiṃsāhrīr とあるところがある。Lévi 本
(p. 29, l. 32) と vihiṃsā hrīr となっているところであ
るが、これは勿論 hrīr は āhrīr に訂正すべきである。
従って一般的には宇井博士の訂正の如く、vihiṃsāhrīr
であろう。

次の uddhavaḥ を uddhataḥ (?) に宇井博士は疑問
符をつけながら訂正されているが、これは中々むづかし
い。なぜなら、写本は Pa. 3 本 (4b, l. 7) は不鮮明であ
るが uddhavaḥ のようであり、Pa. 2 本 (14a, l. 7) と
は明らかに uddhavaḥ と読めるからである。ただチン
ット訳が rgod pa であるので、『大乘莊嚴經論』の用例
(XIV. 47 の長行) からいえば、uddhata の方がよいのか
もしれない。ちなみにロケシュチャンドラの『藏梵辞典』
を見るゝ rgod pa には uddhava と audhata を、
また rgod には uddhata のサンスクリットが与えられ

ている。

すると第十三偈の
sāthyam mado vihiṃsāhrīr atrapā styānam udd-
havaḥ (uddhataḥ ?) (13a-b)

— U — U — — — U — — — U — U —

となるかと思ふ。最初の sāthyam は Ms. と Pa. 2 本
(14a, l. 7) と sāthyam であるが、Pa. 3 本 (4b, l. 5)
が sāthyam と読めるところ、Lévi 本 (p. 29, l. 32) を
参照して sāthyam と理解した。

次に第十三偈の kausīdyam であるが、宇井博士
は kausidyam に訂正されているが、これでよいであ
るか。Pa. 2 本 (14a, l. 7) を見るゝ kausīdyam とな
っているし、Pa. 3 本 (4b, l. 7) もやや不鮮明であるが
kausīdyam のようである。その上、安慧釈でも Lévi
本 (p. 31, l. 31, l. 32) と vihiṃsā kausīdyā とあるが、その底
本と考えられる Pa. 2 本 (16b, l. 1, l. 2) と vihiṃsā kausīdyā
となっている。

確かに kausīdyā より kausīdyā の方が一般的であ
るので、宇井博士 (実は荻原博士が先に指摘された) は
訂正されたのであろう。しかし『大乘莊嚴經論』では七
回程出るが、すべて kausīdyā である。ところから

一般には *kausidya* を用いるから Lévi^③ も偈頌だけ抜き出すとき *kausidya* とつづける。しかし Pa. 2 本 (14a, 1. 7) の Pa. 3 本 (4b, 1. 7) の *kausidya* とあり、『大乘莊嚴經論』では七回とも *kausidya* となっているから、この場合 *kausidya* の形を尊重したいと思う。なおこの第十三偈から第十四偈にかけては、Pa. 3 本 (4b, 1. 5~1. 7) では、

sāṭṭham mado vihiṃsahrir a□trayā styana[m
uddhavaḥ] (13 a-b)

となっていて、Pa. 3 本では少し混乱がある。しかも他ではすべて六行で書かれているのに、ここのだけ七行になっている。これは第十三偈 b の *styana* まで書写して、第十五偈へ移ったので、第十三偈 b c d と第十四偈が脱落したのである。従ってこの脱落した部分を第七行目に書写したため Pa. 3 本の 4b だけ七行になったものと考えられる。ここで a□trayā とあるのは、□は *ya* のようにも見えるが余分の字であり、*atrāyā* は *atrapā* の誤まりである。

六

私が『唯識三十頌』に関する、この論文を書いている

とき、『唯識三十頌』の調伏天 (Vinītaśeva) の釈疏のサンسكريットの断片が発見され、出版されたことを知った。

本論文の中で『唯識二十論』の第一偈、第二偈のサンسكريット原本が見つかったことを紹介したが、今ここに『唯識三十頌』の調伏天の釈疏のサンسكريット断片も見つかったことを知り、唯識思想を研究する者として誠に喜ばしく思う。十三葉は断片であり、それほど多いわけではないが、ともかく、今迄全く知られていなかったサンسكريットテキストが十三葉も見つかったことの意義は大きい。

ただこの写本は序文によると、「一九六六年にロンドン大学で授業をしているとき、ダージリンからの一訪問者が、匿名で十三葉の貝葉を含む一包みを私に渡してくれた」^④ (抄訳) とあるだけで、どこで見つかった写本なのか、どこに今迄保管されていたのか、という出所を全く明かしていない。その点では私もこの写本がはたして信用できるものかどうかという疑問を感じないわけではないが、しかしこの写本には『中辺分別論』の安慧釈のサンسكريットが混入しているとあり、そういうことは写本の場合、しばしば見出されることであるから、むしろ

真実味が感ぜられ、今後詳しく調べないとはつきりした

ことはいえないが、一応信用してもよいように思う。

(しかしなぜ出所を明かさないのであるうか?)

さてこの調伏天のサンスクリットを用いて、先程の問題点が解決できるかどうか検討してみよう。

まず初めに第十一偈の長行の *abhinivṛtiḥ* か *abhinivṛteḥ* か *abhinivṛtīr* かの問題であるが、残念ながら Lévi 本、p. 28, l. 14~l. 16 の安慧釈に相当する調伏天のサンスクリットは脚註^⑤にあるように脱落している。従ってこの *abhinivṛtiḥ* の問題ばかりでなく、*saṃyojana* を *saṃjanana* に訂正する件も調伏天のサンスクリットで確かめることができないのは誠に残念である。

次に第十三偈であるが、*mado vihinṣā* を *mado vihinṣā* に訂正する件は安慧釈でも *vihinṣā* (p. 31, l. 13) とあるから、これでよいと思うが、調伏天の釈疏の部分のサンスクリットでも確かめようとしたが、ここは生憎くサンスクリットが脱落していて確かめることができない。しかし安慧釈を初めとして、前述の如く Pa. 2 本にも *vihinṣā* とあるから、この訂正は正しいと思う。しかるに調伏天のサンスクリット写本の偈頌では、

vihinṣā となっている。これはおそらく偈頌のみは Lévi 本によって補ったため、訂正されないまま間違ったものと思う。

同様にその直後の *hrir* も *ahrir* に訂正しなくてはならないのに、調伏天のサンスクリット本(偈頌)では、*hrir* のままである。安慧釈には *ahrīkyam* (p. 31, l. 17) とあり、各写本の上では *vihiṃsāhrir* とコンパウンドになっているのであるから、チベット訳 *no tsha med* からいっても *ahrir* でよいと思う。なお調伏天の釈疏では、この個所も脱落している。

次の *uddhavaḥ* か *uddhataḥ* かであるが、安慧釈では *auddhatyam* (p. 31, l. 26) とあり、調伏天の釈疏でも *auddhatyam* (p. 485, l. 42) とあるから、Pa. 2 本も Pa. 3 本も *uddhavaḥ* であるが、宇井博士の訂正のように *uddhataḥ* の方がよいのかもしれない。(写本の上では *uddhavaḥ* と *uddhataḥ* は類似しているので、転写のとき混同されたのかもしれない。)

kausiḍya か *kausiḍya* かの問題も、Lévi 本の安慧釈 *kausiḍya* (p. 31, l. 31, l. 32) や調伏天の釈疏のサンスクリット *kausiḍya* (p. 486, l. 10) からは *kausiḍya* が有力のようにも見える。(調伏天の偈頌は *kausiḍya* とな

っているが、これは Lévi 本のまま載せただけなので、資料的にはあまり意味がない。) しかし Pa. 2 本、Pa. 3 本には *kausiḍya* とあり、安慧訳でも Pa. 2 本 (1) の写本が Lévi 本の底本と考えられる) では *kausiḍya* とあるから、『大乘莊嚴經論』などでは *kausiḍya* が何度も用いられている例から見ても、私は偈頌だけでなく安慧訳も *kausiḍya* とあったように思う。

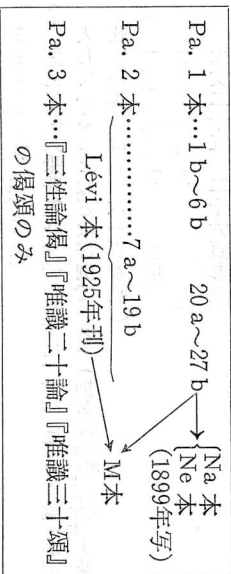
ま と め

以上、『唯識三十頌』を中心に『唯識二十論』の第一偈、第二偈も、ネパール写本を対照して考察してきたが、ほんの一部分を検討しただけで多くの問題点が見つかった。今後は『唯識三十頌』や『唯識二十論』の全体についても考察を試みるつもりである。

ところで『唯識三十頌』に関するネパール諸写本並びに Lévi 本との関係は、大体次の如くなるかと思う。

中でも Pa. 3 本は、わずかに五葉ではあるが、非常に貴重な写本であると思う。『唯識二十論』の第一偈、第二偈のサンسكريットも、この写本によって初めて明らかにされたことの意義は大きいと思う。

(昭和六十一年三月八日脱稿)



註

- ① 宗教学会 (昭和60年) 拙稿「ネパール写本対照による『唯識三十頌』の考察」(『宗教研究』第59巻第4輯、267号) → 七五頁参照。
- ② S. Lévi: *Vijñaptimātratāsiddhi*, Paris, 1925.
- ③ K. N. Chatterjee: *Vijñaptimātratāsiddhi*, Varanasi 1980.
- ④ Mahesh Tiwary: *Vijñaptimātratāsiddhi*, Varanasi 1967.
- ⑤ 「荻原雲米文集」六二八頁参照。
- ⑥ Gokhale: *Fragments of Sthiramatis Triṃśikāvijñaptibhāṣya in the Patna collection of Tibetan manuscript materials*, 1968.
- ⑦ 『唯識二十論』の第一偈第二偈のサンسكريット原本については、誰も発表した人はないと思っていたが、校正の段階で S. Lévi 自身が仏訳を発表するときに「サンسكريットテキストの訂正」を発表し、その中にこれら二偈の訂正があることを知った。

- ⑧ National Archives, Nepal. Bihatsucipatram I, II, III
 4. Suciapatram (Baudhadarsanavajsa) などがある。
 拙著「ネパール写本 大乘莊嚴經論の研究」一八頁参照。
- ⑨ 長尾博士「カトマンドウの仏教学本典籍」一九頁参照。
 拙著「ネパール写本 大乘莊嚴經論の研究」一七頁参照。
 ⑩ 拙著「ネパール写本 大乘莊嚴經論の研究」一七頁参照。
 ⑪ 本文二十頁以下参照。
 ⑫ 本文十九頁参照。
 ⑬ 本文二十頁参照。
 ⑭ Lévi 本 ⑥ Introduction p. xiii, l. 23 参照。
 ⑮ 例えば 5b に移る前後の文章は Lévi 本では asanvidi
 [5b] ta na a na ga Pa. 1 本では asanvidita [5b] na
 へつる。(将やへ Lévi 本の校正をよめる)
- ⑯ Lévi 本 ⑥ Introduction p. xv, l. 31 参照。
 ⑰ 本文十七頁参照。
 ⑱ 本文十七頁参照。
 ⑲ 拙著「ネパール写本对照」の『唯識三十頌』の考察
 (『宗教研究』第59巻第4輯)一七六頁参照。
 ⑳ 註⑦参照。
- ㉑ 宇井博士「印度哲学研究第一」三頁参照。
 ㉒ 宇井博士「印度哲学研究第一」三頁参照。
 ㉓ Lokesh Chandra: Tibetan-Sanskrit Dictionary p.
 1476 参照。
- ㉔ Bühler: Indische Palaeographie II No. VI (四〇〇〇年
 一〇〇〇年代まで北方インドの写本) ⑥ XIII. 31 参照。
 ㉕ 宇井博士「四訳对照 唯識二十論研究」九八頁一九九頁参照。
 ㉖ National Archives, Nepal. Bihatsucipatram II, p. 44
- 参照。
- ㉗ 宇井博士「安慧・護法 唯識三十頌釈論」梵文正誤訂正
 表参照。
- ㉘ Gokhale: Fragments of Sthiramati's Triṃśikaviṇa-
 pitbhaśya in the Patna collection of Tibetan manu-
 script materials (Journal of the University of Poona.
 Humanities Section No. 27, University of Poona, 1968)
- ㉙ 『荻原雲来文集』六三四頁参照。
 ㉚ Lévi 本 p. 29, l. 32 参照。
 ㉛ 荻原博士はこれを「写誤」と指摘されている。(荻原雲来
 文集六三五頁参照)
- ㉜ G. Nagao: Index to the Mahāyāna-sūtrāṃkāra
 (Part One) p. 81 参照。
- ㉝ Lévi 本 p. 13 ⑥ 偈頌参照。
- ㉞ Jaini: The Sanskrit fragments of Vinīṭadeva's Triṃśi-
 kā-tika (Bulletin of the school of Oriental and African
 Studies, University of London, vol. XLVIII. Part 3, 1985)
- ㉟ 本文二一〜二二頁参照。
- ㊱ Jaini: The Sanskrit fragments of Vinīṭadeva's Tri-
 ṃśikā-tika p. 471 参照。
- ㊲ 例えば『大乘莊嚴經論』の写本に『法法性分別論』が混
 入していることなどは好例である。(拙著「ネパール写本
 大乘莊嚴經論の研究」六一頁参照)
- ㊳ Jaini 論文 p. 482 参照。
- ㊴ Jaini 論文 p. 485 註 65 参照。
- ㊵ 本文二二五〜二二六頁参照。